

『西明寺』燃え尽きず

小道 周帆

東の空が白み始め、近在の農家から一番鶏が鳴く頃に、西明寺惣門に息せき切った男が二人現れた。門を固めていた僧兵が薙刀を構え駆け寄った。

「何奴だ！」

「比叡山から夜陰に紛れ逃れてきた明照と申す」

「同じく天芳と申す。三年前まで西明寺の僧坊で修行しておった。ご指導を頂いた大僧都の良忠様にお取次願いたい。火急の用で参ったと」
「暫し、待て！」

時は元龜二年（一五七一）九月十三日の早朝であった。

案内されるのもどかしく、二人は大声で叫んだ。

「延暦寺が燃えております！信長が火を放ち、比叡山全山が火の海になりそうでございます」

「逃げ惑う僧侶は無論のこと、女・小童までも追い回し首を打ち落とす、さながら地獄絵を見ておるようでございます」

「我らは偶々坂本に居りましたので、信長勢の動きを察知できました。噂によれば信長は延暦寺に類する天台宗の寺をも攻めるとのこと、延暦寺に次ぐ修行寺であります西明寺も狙われておると思ひ、参りました」

朝の勤行で法華懺法を誦誦中の多くの修行僧は、それを中断して、何事かとの出で立ちで馳せ参じてきた。

外の騒がしさを感じつつも、大僧正の栄達住職はいよいよ来るべきものが来たかとの思いであった。

と、いうのは昨年九月十六日、信長が大坂本願寺と戦っている間隙を縫って、その背後を突こうと浅井・朝倉軍が坂本に侵攻した。宇佐山城を守る森可成と援軍に駆け付けた信長の三弟織田信治を討ちとり、落城まであと一步に迫っていた。この戦いで比叡山の僧兵も浅井・朝倉軍に加わっていたのだ。

比叡山は浅井・朝倉軍に、そして当山の近くにある百済寺ひやくさいじは六角義賢たかに肩入れしていた。いずれも反信長勢である。我が西明寺は修行道場の場であり、天台大師『摩訶止観まかしかん』で述べられる常行三昧じょうぎょうざんまいに身を置いている。それがために諸大名との関係は一切ない。比叡山も本来は修行の場であるにもかかわらず、富や権力を求める姿勢と、それに伴う墮落には同門の一人としてほとほと呆れ返っていた。比叡山の僧兵はその数も武装も戦国大名の兵と変わる所がないほどで、我らの守衛替りの僧兵とは異質のものであった。

そんな違いがあるのに、なぜ西明寺が延暦寺と同様に攻撃を受けねばならないのか榮達住職には合点がいかなかった。思い当たるとすれば、当山には比叡山のやり方に不満の持つ僧や、昨年の信長の要請を無視したがために比叡山はいずれ攻撃を受けると考えた僧たちが避難している。その僧たちが比叡山の別動隊として戦うと考えたのだろうか。

それとも、もともと信長は京都と本拠地美濃との通路を確保する必要があり、その通路上の近江を勢力下とする朝倉や六角、そして比叡山は邪魔者であり、それらをせん滅せねば天下を獲れないと考えているため、比叡山と関係があり、広い寺域を持つ西明寺も同様に邪魔になると考えているのだろうか。

昨年の元亀元年（一五七〇）に信長が比叡山に要請した背景と、その後の戦況は、榮達住職が知る限りでは次のようであった。

浅井・朝倉軍が宇佐山城を攻めていると聞いた信長は本願寺との戦いを中断し、急遽九月二十四日には浅井・朝倉勢を蹴散らし、早々と宇佐山城に着陣した。浅井・朝倉軍は予想外の信長の早い動きに対応できず、比叡山に逃げ上り迎撃の態勢をとった。

山の上に居る敵を下から攻め上がるのは容易ではない。さすがの信長軍も攻めの手立て付かず、難渋していた。

そこで手を打ったのが比叡山延暦寺と浅井・朝倉軍との分断工作であった。延暦寺の高僧を宇佐山城に呼び付けて、こう要請した。

・浅井・朝倉勢に味方するのを止めれば、取り上げていた諸国にある山門領地は全て延暦寺に返還する。

・我に味方が出来ないとなれば、出家の身であり、戦いには関わらず、

せめて中立でいてくれないか。

・この頼みを聞き入れないならば、容赦はせず、根本中堂をはじめ、比叡山の寺堂をことごとく焼き払う。

「いいか！この信長の要請事項と、聞き入れられぬ場合の対応を天台座主かくじよ覚恕にしかと伝えよ」

高僧たちは既に浅井・朝倉勢が比叡山に逃げ上った時に、天台座主覚恕は支援を約し、比叡山に匿っていた。座主には言うも及ばぬと考えており、冷笑を浮かべる態度で、信長の要請を受け入れる気持ちは微塵もなかった。比叡山側は信長の言は単なる威嚇に過ぎず、いかに信長といえども神仏への攻撃は出来まいと気楽に考えていた。

こうして信長軍と浅井・朝倉軍との膠着状態が二ヶ月も続いたために、反信長派の一向一揆や本願寺勢、それに三好三人衆らを勢いづけることにもなるやもしれぬ。信長としては一刻も早く決着したいとの思いが強かった。

一方、朝倉軍も冬が近づいているだけに越前への道が閉ざされる前に膠着状態を脱したいと考えていた。

こうした状況を踏まえ、信長は、將軍と正親町天皇おおぎまちてんのうに和睦の仲介を働きかけた。関白・二条晴良が動き、將軍足利義昭とともに調停役を務め、十二月十三日両軍の講和が成立した。

講和条件

① 近江北郡の領地三分の一を浅井氏に、三分の二を織田氏とする。

② 延暦寺は幕府を粗略にしないことを条件に、信長の保有する延暦寺領地は返還する

③ 互いの人質を交換する。

そして、織田軍は勢田まで撤退し、浅井・朝倉軍はほぼ三ヶ月ぶりに高島を通過して帰国する。ここに志賀の陣は終了した。

栄達任職が思うに、比叡山延暦寺はこの時に勘違いをしていた。信長の要請を反故にした比叡山の強い姿勢により、信長が和睦の道を選ばざるを得なかったと考えた。即ち、我ら比叡山が勝利したと思いいんだのだ。

それが証拠に、天台座主覚恕は正親町天皇の弟をいいことに従来の

ままの横柄な姿勢は変わることはなかった。講和で約された幕府に対しても、朝廷に対しても、鎮守の姿勢は見られないまま、相変わらず、仏道修行に手を抜き、淫乱に浸り、金銀を欲し、浅井・朝倉に加担する姿勢を続けていた。

このままでは済むまいと思っていたところに、今、比叡山炎上の知らせを受け、栄達住職はいよいよ来るべきものが来たと思ったのである。

比叡山の炎上は大変な事態であると思いつつ、我が西明寺をも焼き打ちされるとなれば、如何に対応すべきかである。承知元年（八三四）に任明天皇の勅願によって開創された歴史のある寺院であり、本堂は鎌倉時代前期に建築されたものだ。さらに鎌倉時代後期に建てられた三重塔、その内部の壁画は他に類するものがない素晴らしいこげらぶ柿茸き八脚門こげらぶかかっている。室町時代初期に建立された二天門も珍しい柿茸き八脚門である。さらに秘仏としている薬師如来立像、それを守る十二神将立像等々貴重なものがたくさんある。これらを灰燼に帰するわけにはいかぬ。

さらに栄達住職の心配は、ここで学ぶ五百人余の修行僧だ。彼らが信長軍の放火を防ぐべく戦ったとしても勝ち目はなく、多くの命が失われよう。これは何としても避けねばならない。比叡山の焼き打ちにより、問答無用で多くの名僧、学僧までも殺害されていると聞く。それだけに仏道を極めるべく学ぶ西明寺の修行僧を死なしてはならぬと強い決意をした。

そこへ良忠に連れられて比叡山から逃れてきた明照と天芳がやって来た。

「大変な中、よくぞ知らせに来てくれた。ありがたいことだ」

栄達住職は二人に合掌して、礼を述べた。

「まずは焼き打ちの状況を知りたい」

「ここ数日の間に比叡山の東麓に織田軍が侵攻してきておりました。十二日の早朝、信長が直々に指図して坂本にある延暦寺の守護神である日吉神社の放火を手始めに、坂本に建てられていた堂坊の全てに火を付けました。それを合図に比叡山の各所から法螺貝と勝ち鬨の音が

上がり、併せて火の手が上がりました」

「我らと同じように坂本に居た僧が逃げようとしても、行く手を阻まれ問答無用で切り付けられました」

「何とか逃れようと必死に隠れておりましたところ、『比叡山が終われば、次は近江にある天台宗の寺院も同罪だ。火を付ける』という声が聞こえた次第です」

それを聞いて西明寺の僧たちは、比叡山の奥山の堂まで火を付けるとすれば二、三日は掛かる。そうとなれば西明寺には十五日頃にやってくるかと覚悟した。

栄達住職を中心に重責の僧たちが集まり、対応策を協議した。

「攻められるまで二、三日ある。それまでに何をするかだ」

「全員が僧兵の装備をしたとしても五百人程度の兵力にしかならない」「織田軍の一部といえども、攻めるとなると三千人の兵が来るだろう。勝負にはなるまい」

「そうなるよ：戦わないで、仏像や経典を守るにはどうすればいいか」「どこかに避難させるしかないだろう」

「避難といっても、三重塔の貴重な壁画は動かせないぞ」

「本堂内に安置されている秘仏の薬師如来や釈迦如来、不動明王、十二神将を動かすには容易なことではない」

「ちよつと落ち着こう。ここで攻めて来る武将の気持ちになってみてはどうか」

「信長の比叡山焼き打ちに反対した家臣もいたはずだ。仏様を敵に回して焼いてしまえば、必ず天罰が下り、地獄に送られてしまうと恐れる者もいるに違いない」

「我々はそうした者に対して、仏教の教えを説いて救うのが役割であるろう」

「真に『善因善果』『悪因苦果』の教えを伝えたい」

「命懸けになろうが、敵将に西明寺の考えと、仏教の教えを説きに行く僧を送り込んでどうか」

「そうは言っても、素直に聞き入れるとは思えない」

「では、延暦寺と西明寺との違いを話してはどうか」

「攻める武将にそんな話を聴くゆとりはあるまい」

「確かに僧の命乞いや仏像の価値を伝え、焼き討ちを止めて欲しいでは済む話ではなからう」

「解った。敵将への説得は私が行く」

と強い気持ちで登せられたのは栄達住職だった。

一同、しばし沈黙。

「住職が説得されたとしても、信長の命令は絶対であり、それに背く行為は取れないのではないか」

「信長が西明寺まで来て指図するとは思えない。ならば、攻め手の将が信長に間違いなく西明寺を焼き打ちしましたという報告ができれば良い訳だ」

「西明寺には各種の堂が十七、僧坊が三百ある。どうだろうか、これらを我々の手で火をかけた上で、恭順の意を、西明寺を代表して住職が敵将に表明されては：」

「それはいい考えだ。戦いの中で仏教の教えを説くよりも説得しやすい。私はその任に当たろう」

少し笑みを浮かべながら、栄達住職が自信をもって話された。

「誤解するではないぞ。全山燃やすにしても本堂と三重塔、二天門を残す方法を考えて欲しい」

「幸い、本堂と三重塔は二天門が遮った形で山奥にあります。書院や三百の僧坊は山の中腹に集中しております。これらを一齐に火をかければ、全山炎上していると見られます」

「ううん、念のため二天門の前では高くて広い櫓を組み、あたかも本堂が炎上しているようにして、一切近づけないようにしておいた方がいいでしょう」

「よっしっ、方策は決まった。重要な経典は本堂に集めよ。僧侶の力で櫓を組もう。十四日の夜間、うん、十五日の明ける前の寅の刻に一齐に火を付けるのだ」

「その火を背景に私は敵将に面会し、恭順の意を表そう」

「住職、その後も坂本から逃れてきた僧が何人かおられます。彼らの情報では、信長は焼き打ちを指示した翌日に、比叡山を出て京都に向かい将軍・御所に報告に行ったようです。後の始末は明智光秀、佐久間信盛、中川重政、柴田勝家、丹羽長秀に任せたとのことです」

「では西明寺には誰が向かって来るのか」

「逃げる途中で見かけたのは、佐和山城の城将である丹羽長秀と河尻秀隆の兵のようです。比叡山から佐和山城に戻る途中で西明寺を襲おうとしていると思われます」

「どちらも信長の信頼の厚い昔からの部下だな」

「丹羽長秀というのは、『米五郎左』と呼ばれており、織田家にとって米のように欠かせられない人物だと言われております」

「私は丹羽長秀様の出生地近くの春日井にある常泉寺から来ておりますが、住職から『丹羽秀長様は温厚で誠実な方で、織田家の家臣団の中では誰からも信頼がおかれている』と聞いております」

「信長自身も『長秀は友であり、兄弟だ』と語っているようです」

「解った。丹羽長秀様に会いに行こう」

「住職、私も同行させて下さい」

と、春日井からの僧高盛が申し出た。

「住職、申し上げます。私は河尻秀隆様の菩提寺である勝山の長蔵寺近くの平泉寺から来ております。河尻様は仏教への理解の深い殿様で、戦火で全焼した大泉寺の復興を支援されております。私も住職に同行して、河尻様にお会いしようございます」

と、僧の重茂が申し出た。

「ありがたい。高盛、重茂と一緒にいきましょう。寺での対応は副住職にしてみらうので、それに従って手抜きなく、重要品の移動・保管、そして火の放ちをお願いする」

準備万端。五百人の僧のうち、若い修行僧は経典等の重要物を本堂に運び、櫓の準備を終えたところで、副住職から指示があった。

「ご苦勞。自らが修行している寺、また学び舎ともいうべき僧院に火を放つのは耐えられないことと思料する。寺は燃えても教えは永遠であり、それを後世に伝えるのは我らの使命である。この後、何が起るか分からない状況であり、その使命の担い手こそ若い僧である皆さんの使命である。」

ついては火を放つ作業は我々指導僧と中堅の修行僧で行う。若手の修行僧は今すぐ寺を離れ、出身の寺院に戻ってもらいたい。いいか、後ろを振り返ることなく、将来に備え、学び続けて欲しい。

ではさらばだ」

「おい平吾、これでいいのか。俺は残りたい」と、涙声。

「敵将が攻めてくるかもしれない。そうすれば命だけでなく、仏教の教えも燃え尽きてしまう。副住職の言った我々の役割を忘れずにいたい。気持ちちは泰蔵と同じだが、仏教の発展を図ろうぞ」これまた涙声。

二百人あまりの若い修行僧が西明寺の中門、そして最後に名残惜しみながら惣門に手を合せ深々と頭を垂れて、離れて行った。

それを見送りながら、いよいよ来るべき時が来たと残った僧は覚悟した。願わくば、敵勢が本堂に近づくことなく、西明寺炎上を見届けてもらいたい。

「信長勢と思しき兵の一群が遠くに見えました」

「しからば、各僧は持ち場の堂、僧坊、房舎の前に立ち、一斉に『般若心経』を大声で唱えてもらいたい」

観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。
度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。
色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。
舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。
不增不減。

(注①)

「なんだか坊主が大声でお経を唱えているぞ」

「我らとの鬨の勝ち鬨のつもりか」

「いやいや、お経となると仏への願い、祈りではないか」

「そうか、西明寺に火を付けないでくれとの願いなのか」

「殿！如何でございますか」

「さてと、我らは信長様の命令により、西明寺を比叡山と同様に焼き尽くすしかないだろう。そうでございましょう、丹羽殿」

「ふうむ、辛いな。比叡山で、あれほどまでに殺戮するとは思わなかった。昨年の信長様の要請に対し、比叡山の僧どもは小バカにした態度をとったのが、文字通り信長様の怒りに火を付けた。さらに宗教人としてあってはならない金銭欲、色欲に耽っておった」

「西明寺はその件には直接関係しておりませんが…」

「うん、天台宗だけが比叡山と共通しているが、同じように焼き打ちするのは忍びない感じがしないでもない」

「そうは言っても丹羽様、信長様が命ぜられた焼き打ちはせざるを得ないでしょうな。ただ、我らの良心として、戦いを放棄した僧の命を奪うのは避けたいものです。如何でしょうか」

「その通りだ。もうこれ以上の僧の殺戮はしないで臨もう」

「兵の一群がはつきり見えるところまで近づいて来ているぞ」

「読経止め！火を放つ準備に入れ」

その時、住職と二人の僧が丹羽・河尻軍の陣の傍に居た。それを確認して副住職は叫んだ。

「太鼓の音を叩くと同時に、火を放て！」

「丹羽様、河尻様、ただいま読経が止まりました」

「僧が三人、我らの陣に参りました」

「おお、西明寺から火の手が上がりました。燃えております」

「我らより先に西明寺に向かった者はいないはずだ」

「すると、西明寺の者が火を付けたのか」

そこへ僧三人が丹羽様、河尻様のところに案内されて平伏していた。

「西明寺住職を務めております栄達でございます。後ろに控えておる者は西明寺の修行僧高盛と重茂でございます」

「何用かな」

「御覧の通り、西明寺に我らの僧が火を放ちました」

「何ゆえだ」

「ハイ、お殿さまの手を煩わせず、自ら比叡山と同じ天台宗の寺として自戒を込めて、信長さまへの恭順の気持ちから火を放ったのでございます」

「なんと、僧が自らの寺を燃やしたのか。恭順の気持ちからとはよくぞ申した。天晴れであるぞ」

「今、燃えております手前の火の手は、惣門、中門、観正坊をはじめとした中心的な堂と僧坊、房舎でございます。奥の一段と激しく燃えておりますのは本堂でございます。やがて全山が火に覆われます」

「確かに勢いよく燃えておるな。全山に燃え広がるのは間違いない火の勢いだ」

「して、僧はどうしておるのか」

「焼き尽くした西明寺を後に、修行僧並びに指導僧はそれぞれの出身寺院へ戻ります」

「申し上げます。丹羽長秀様。拙僧は高盛と申し、春日井の常泉寺から参っております。指導を頂いておりますのが住職の清行様でございます」

「おおそうか、懐かしいのう。幼児の頃からお寺には遊び場としてお世話になったものだ」

「西明寺で修行して三年になりますが、今回のことを契機に故郷春日井の常泉寺に帰ろうと思っております。よろしいでしょうか」

「西明寺のことは残念だが、春日井に戻り、町の人々の心を安寧にしてみたい」

「ありがとうございます」

「河尻秀隆様、愚僧は河尻様の菩提寺であります長蔵寺の隣にありますが平泉寺出身で、西明寺で修行中の重茂と申します」

「勝山の長蔵寺は良い寺だ。近くの平泉寺も知っておるぞ。それはご苦労」

「は、はあー」

「住職、暫し待っておれ」

と、丹羽長秀と河尻秀隆は別室に向かった。

「丹羽殿、我々と縁のある寺院の僧も西明寺で修行しておりますな。

どうでしょう、僧の命を助けたいと思うのですが…」

「いやいや、河尻殿に相談もせず、春日井出身の僧に戻っても良いと申してしまつた。それでよかろう」

「西明寺の焼き打ちについては如何いたしましょうや」

「我らが焼き打ちする前に、僧たちが自らの手で火を放っており、現にあれほどの勢いで燃え広がっております。我らはそれをしかと見届けておるではないか」

「敢えて門前の街に兵を繰り出して、民を恐怖に陥れる必要もないと考えてよろしゅうございますか」

「その通りだ。それで行こう。信長様には私から伝えておく。『西明寺は事前に信長様に恭順の意を示し、自らの手で火を放ち、それが燃え尽きる様をしかと見届けました』と」

「西明寺を燃え尽くした後には、その次のご下命が信長様から我らに発せられていましたな」

「うん、信長様の元家臣でありながら、本願寺方に内通して一揆を蜂起させた上、本願寺に駆け込んだ高宮右京亮の成敗だ。これは急がねばなるまい」

「しからは早急にその準備をせねばなりません。兵を我らの居城佐和山城に戻し、作戦を練りとうございます」

「では、出発だ」

「三人の僧には『西明寺の恭順の気持ちをしかと受け取った。よって各僧は引き続き仏に仕えてもらいたい』と申しておけ」

丹羽・河尻の兵三千が陣地より撤退し、佐和山城に向かった。兵が見えなくなるまで見送っていた住職栄達と修行僧高盛と重茂は我に返った。

「やりましたございます」

「作戦成功でございますね」

「丹羽長秀様、河尻秀隆様は立派な武将だ。全山燃失を現場まで行って確認されなかったのは、深いご思慮があったからこそだ」

「我ら全国の寺院から来ている修行僧の存在に気付かれたからでしょうか」

「それもあろうが、お二人には御仏に対する日頃からの帰依するお気持ちが強いからであろう」

こうして三人は僧坊の焼け跡を見ながら本堂に向かった。そこには本堂の前にわか作りの櫓の見事なまでの焼け残りが、輝いて見えた。

副住職が飛び出してきて、

「本堂、三重塔、二天門は無事でございます。薬師如来立像、釈迦如来立像も十二神将立像、日光菩薩も月光菩薩も全くの無傷です。三重塔内の壁画は煤を被ることなく無事でございます」

「各僧の働きにより、西明寺は焼けたとはいえ、焼き尽くすまでは行かなかった。これ偏に御仏のお陰である。さらに僧は一人として命を

失わなかった。西明寺の再建の大きな力になろうぞ」

改めて僧一同、本堂の仏を前に菩薩戒経偈を唱えた。

がこんるしやな
我今盧舎那
ぶげんせんしやか
復現千釈迦
かくさぼだいじゆ
各坐菩提樹
るしやなほんしん
盧舎那本身
くらいしがしよ
俱来至我所
ほうざれんげだい
方坐蓮華台
いつけひやくおくこく
一華百億國
いちじじようぶつどう
一時成仏道
せんひやくおくしやか
千億釈迦
ちようがじゆぶつかい
聴我誦仏戒
しゆうそうせんげじよう
周匝千華上
いっこくいつしやか
一國一釈迦
によせせんひやくおく
如是千百億
かくしようみじんじゆ
各接微塵衆

お経は止むことなく続いていく。

(注②)

完

(8721字)

〈参考〉

・法華懺法(ほっけせんほう)

法華経を誦誦して六根の罪障を懺悔し、滅罪を願う儀式。

天台宗で行なわれるもの。

・魔訶止観

仏教の論書の一つで、止観(止は三昧、観は智慧)。仏教瞑想はこの二つから成る。上座部仏教でいうサマータとヴィパッサナー)についての解説書。十卷。

五九四年に中国荊州(現在の湖北省)玉泉寺で天台智顛によって講義され、弟子の章安灌頂によってまとめられた。天台三大部の一つ。

・常行三昧(じょうぎようざんまい)

仏教用語。中国天台宗の智顛以来始められた修行。四種三昧の一つ。

七日ないし九十日を期限として行わ、阿弥陀仏の像のまわりを歩きながら、その名を称えて阿弥陀仏を念じる三昧修行。

注① 般若心経の訳

観自在菩薩が、甚深にして微妙なる般若波羅蜜多の修行をされた時、万物を構成する五蘊はみな空であるのご照覽されて一切の苦厄から抜け出された、即ち覺られた。舍利弗坊よ、全ての眼に見えるもの即ち「色」は実体が無く究極的には空だよ。そして「空」も色と言えるのだ。色は空、空も色。精神作用の受、想、行、識も物質と同様に究極は実体がなく空なのだ。舍利弗坊よ。この、万物の実体は空であるから、生ずると言っても、何も新しく生ずるものではない。滅すると言っても、全てが一切無くなってしまふのではない。汚いとか綺麗とか、増えたとか減ったとかは、夫々の事物の囚われによる錯覚なのだよ。

注② 菩薩戒経偈の訳

わたしは、今盧舎那となって、蓮花台に坐した。周囲には、千の花があり、その上にもまた、千の釈迦が坐す。一の花には、百億の花びらがあり、その上に、百億の国がある。一の国には、一人の釈迦がおり、各各、菩提樹の下に坐して、皆、一時に道を成じる。この千百億は、皆、盧舎那を本身とするからだ。千百億の釈迦は、各各、微塵（無数）の衆を伴い、わたしの所に至って、わたしの誦する仏戒を聴く。